



島花梨、ステップス初個展である。島は千葉県生まれ、2010年、多摩美術大学大学院美術研究科油画専攻修了。個展は学部入学時の2008年に東京で、2011年は岐阜で、2013年は奈良で行っている。グループ展は2005年に東京からスタート、2012年と13年の on the steps にも参加している。私は二つの on the steps で島の作品と向き合っている。私は自分が持つ過去の写真と展評から、制作の姿勢は保ちながらも徐々に展開している島を確認することができた。色、形を保持しながらも、描き方、絵具の盛り方、筆致、素材、試行錯誤を繰り返している。いつも数点だしているが、今回は個展なのでじっくり向き合えた。

今回島は小品を4点、中型を14点、大型の作品1点を出品した。オーナーの吉岡まさみのブログによるとタイトルは「ゆらぎ」で、島は「作品をつくるときはいつも水のイメージがあるという」。小品は事務所で、画廊では大型/中型作品で構成し、作品が揺らいでいる印象を与えた。

作品は全てキャンパスに油彩である。しかしこの透明感は何だろう。地と図の関係は入り組んでいて、何が地で何が図なのかが判断できない。それどころか、果てしない薄塗りのためか、下に描かれている図が透けて見えて、幾層になっていることが容易に確認できる。

それ以上に注目すべきは、色と色とを隔てている線にある。深く掘られているようにも、盛り上げられているようにも感じる。線が入ることで三色/三面になるのではない。この線は特別な時空をさ迷っている。国境のような境界線とは反対に、全てを区別しないための特別な処置のように思えてならない。

私は、日本画の輪郭線とは影であると確信している。西洋画、特に油彩に輪郭はない。その代わりに影が克明に描かれている。島の作品はそのどちらにも当て嵌まらない。それは線ではなく、痕跡なのかも知れない。何の痕跡かを、次の個展の際に確認し考える必然が私に生じた。

